

認知症ケア高度化事業 事例ワークシート 事例 37

A 課題の整理 援助者が感じている課題

事例にあげた課題に対して、あなた自身が困っていること、負担に感じていること等を具体的に書いてください。

- ・「貸した金を返して欲しい」「息子が心配だ」を繰り返し訴え興奮する。スタッフも難しいことを説明するのだが、その話を留めておくことができないため話を繰り返す。
そうした状態の時には、食事や排泄介助を一切受け付けず、まわりの入居者やスタッフに激しい口調で話す。

【質問】

繰り返し訴え、興奮する時に、スタッフがしている数多くの説明や関わり方などのうち、わずかでもAさんに響いたかな？（興奮がゆるんだ）と思われるような出来事はありましたか？

【回答】

やはり、Aさんにとって安心する答えによって興奮が鎮まることが多いです。現実を突きつけない対応でやり過ごすことがAさんの興奮を和らげています。ただし、短絡的に答えると「金を今見せてみて。」とか「今、横で電話して。」と言われ、対応に苦慮するスタッフもいます。

B 課題の整理 援助者が想定する対応・方針

あなたは、この方に「どんな姿」や「状態」になって欲しいのですか。

- ・穏やかな状態の時には、にこやかに過ごしている。まわりの入居者やスタッフとの会話も弾んでいる。そうした状態が一日中続くことを願っている。

【質問】

たくさんの方のつらい経験を持つAさんが穏やかに過ごしているときの気持ちは、どのようなものだろうと考えられますか？

【回答】

穏やかな気持ちで過ごしている時には、生きることに苦しみが伴うことを理解しながらも前向きな気持ちになっている状態だと想像しています。そのときには、一時でも辛い体験や息子のことは頭から離れているような気がします。

【質問】

会話が弾んでいる時と興奮している時とでは、時間帯や周囲の様子などいろいろなことにも違いがあると考えますか？

【回答】

特に時間帯が決まっているわけではありません。周囲がざわついているときに、興奮する感じもありません。食事や入浴の時間などには興奮することは少なく、何もすることがなく、考え事を始めた頃がサインだと思っています。

そのために、当面どんな取り組みをしたいと考えていますか(考えましたか)。

- ・ Aさんが「借金のこと」などを心配する状況にならないよう、生活に必要な物品をまわりにしつらえたり、好きだと思われることをできるようにしてきた。

【質問】

Aさんの必要な物品をまわりにしつらえたり、更に好きであろうと思われることができるなどの関わりをした前と後では、Aさんとスタッフの両方にそれぞれ何かの変化はありましたか？

【回答】

必要なものをしつらえていく作業は、はじめのうちは興奮した状態で次から次へと出てくるものをしつらえていったので、スタッフは対処に苦慮しましたが、落ち着いた状態の中で、話をして少しずつ揃えていくようにしたら、意外とゆっくと準備することができました。

Aさんは、居室の中に自分の物が増えていったことで満足したことと思いますし、スタッフも要求がなくなったことで満足し、Aさんが落ち着きを取り戻すのではとも思っています。

贅沢をした方ではなかったため、最近ではしつらえが増えていくことはなくなったようです。

C 本人の状態や状況を事実に基づいて確認してみよう

困っている場面で、本人が口にする言葉、表情やしぐさ等を含めた行動や様子等を事実に基づいて書いてください。

- ・ 突然、穏やかな表情を変え、「貸した金を返して欲しい。」「長男は私が死ぬほど働いたのに、私のことをうっとうしがる。」と、時に泣きそうな表情で訴える。一通り話し終えても話はまた元に戻り、戦争時代の苦労話から、夫のこと、自分で稼いで子育てをした話が続く。数時間話し続けると、疲れ果てて眠る。数日おきにその状態になる。

【質問】

数日おきに変化がある様子ですが、疾患的なことや身体的な不調、環境の変化などとの関連性がどのようなと考えますか？

【回答】

身体の具合が悪い(身体的に痛みがある)ときには、興奮することが少ないように感じます。むしろ身体の痛みがないときに訴えが出てくると感じています。ユニット内の他の入居者に面会が多いときは、やはり子供のことを心配することが多いように思います。

D 課題の背景や原因等の整理

本人にとっての行動や言葉の意味を理解するために、別紙の展開図に記入してから、課題の背景や原因として考えられることを書きだしてみましょう。

- ・ 一生懸命働いてきたが、戦争や騙されて財産を何度も失っている。
- ・ 子供達を溺愛していたが、それぞれの事情がありあまり関係は良くない。そうしたことから「なぜ一生懸命生きてきた自分が不幸に・・・」との被害意識が強い。喪失感とあわせ、その点が精神的不安の大部分を占めている。

【質問】

奉公から始まり、大変な人生を送ってきたのに、現在の自分は不幸だとしか感じていない今のAさんに対して、楽しかったことや喜びを感じたことなどにも目を向けてもらおうとする関わりについてどのよ

うに考えますか？

【回答】

一人で生きてきたプライドを尊重することが、とても大切だと考えていますので、そういった話に耳を傾けたり等、そのプライドを傷つけないようにしています。

ただ、趣味も持つ等、自身が楽しみを持って生きると言うことを幸せと感じないような気もしています。楽しかった時代は、きっと働いて自分で子育てをしていた頃だと思うので、施設でもむしろ他人の世話をすることを生きがいとするような取り組みが必要だと考えます。

E 事例に書いた課題を本人の視点に置き換えて考えてみよう

ここで、この事例を本人の立場から、もう一度考えてみましょう。

本人の言葉や様子から、本人が困って（悩んで）いること、求めていることは、どんなことだと思いますか？

- ・大好きな子供達が、自分のことを気遣ってくれること。
- ・自分がやってきたことが間違っていないことを認めてもらえること。

F 課題解決に向けた 新たなアイデア

あなたが、このワークシートを通じて思いついたケアプランなど、新しいアイデアをいくつか書き出してみましょう。

- ・動物が好きだったことを生かし、気持ちを転嫁させるプランを作りたい。

【質問】

気持ちを転嫁させるプランを作ろうと思ったのはどのような話し合いや考えがあったのでしょうか？また、実践にあたってAさんにはどのように伝えようと考えますか？

【回答】

入居前、動物を世話していたということをお子から聞いたためです。ただし、実際には、世話を続けられず、離れてしまっています。また、施設では、個人の動物を飼うことには問題が多く、許可しがたい状況ですので、植物等の世話をAさんが行うことを考えています。

- ・離れて暮らす子供をととても大切に思っているので、手紙等、関係をつなげる工夫をしてみたい。

【質問】

過去の記憶は、楽しい記憶だけではないと思われませんが、そのつらい部分についてのAさんへの関わりはどのように考えますか？

【回答】

辛い部分のことは、Aさんが話し出した際に、今後も傾聴していくつもりです。子供達のことについても傾聴していきます。

【質問】

スタッフが共通した考えでAさんへの関わりが行えるように、スタッフに向けてのサポートなどを考えて（あるいは実践して）いるのであれば聞かせて下さい。

【回答】

興奮状態の時には、入居者ではなくスタッフがかかりきりになるため、そのスタッフのストレスが増

大します。いらいらする厳しい状態になるので、最近では一人のスタッフが対応しきれなくなると、そのスタッフが長く対応するのではなく、責任者だと偽って早めに他のスタッフが対応するようにしています。

【全般的な質問】

身体的に影響が出るほど興奮状態が激しく続くAさんの背景には、長い間の苦勞とそのことが報われない現在との大きなギャップや、家族関係等、つらい人生があったのだと知らされました。その背景を理解しながら、日々傍にいて少しでもAさんが癒されるように、Aさんが新たな生活の場でこれまでの生き方を認められるようにするにはどうしたらよいのかと、真剣に取り組んだことがとても伝わってきています。

このような背景を抱えた方に対しての関わりは、とてもデリケートな部分も多く、繊細な配慮などが必要とされるのかも知れませんが、そのあたりで何か考えたり、気づいたことはありましたか？

【回答】

ご指摘のとおり、デリケートな対応が必要であることを感じています。Aさんの気持ちとして、過去の話に触れて欲しい時とそうでない時があるように思っています。話が止まらない時には受容と共感の対応を心がけ、全く話さない時には、こちらから過去の話を出すことは現在自重しています。

最近は特に子供達のことを気にする際の対応に神経を使っています。スタッフも対応に苦慮しています。

(助言者の考察)

体調が悪くなるまで興奮するAさんにとって、何が安心になるきっかけとなるのか？という一点に注目し、多方向から考え取り組んでいる事例でした。Aさんにとっての安心する答え方を模索し、興奮を鎮める言葉や表現を工夫したり、現実を突きつけるのではなく、敢えて現実ではないことでの対応でその場をやり過ごすことが、Aさんの興奮を和らげることだと考えたりしています。

また、穏やかに過ごしているときのAさんの気持ちを、「生きることに苦しみが伴うことを理解しながらも前向きな気持ちになっている状態」と想像するなど、人が生きていくという最も大切な観点を、スタッフで共有し合い、関わりを続けていました。Aさんの生き方に注目することで、一人で生きてきたプライドの尊重が大切なことと考え、その中でも、働いて子育てをしていた時代は、Aさんにとって大切な時代だったのではという気付きから、具体的な計画にまで展開しています。

このように、Aさんとスタッフとは、Aさんの言葉のみにとられるのではなく、その言葉の向こう側にある人生を知ろうとし、一緒に振り返りながらゆっくりと今を大切に生きているように思いました。この事例は、疾患としての観点もしっかり持った上で、展開シートで分析しているような細かな考えや過程がベースになっているということと、目の前にある問題ととらえてしまいがちな事柄に惑わされることなく、またそれを認知症の症状だからと片づけてしまうこともせず、常に「その人の生きるとは？」ということに焦点をあてながら、「一緒に今を生きる関わり」をスタッフ全員で示してくれました。決して、急いで答えを求めるのではなく、時間をかけ、Aさんに問いかけながらゆっくりとサポートする関係の在り方を教えてもらった、とても貴重な事例でした。